



令和6年度(2024年度)
森村学園中等部入学試験
出題方針

令和5年(2023年)6月7日

入試問題について

日本の教育は、現在大きな変革期を迎えております。それは学力のとらえ方に象徴的に現れています。入学試験において、知識量・演習量だけがものを言う時代は終わりを告げようとしています。入試を突破するための学力ではなく、未知なる困難・課題を自らの意志と知恵で解決していく力を支えるのが、これからの学力と言えましょう。

森村学園中等部・高等部では、従来の教科学習の在り方にとらわれず、新たな学力観に基づいて生徒の気づきを促し、より主体的な学びへと導く指導への転換を進めています。

その一環として、各教科の入試問題には新しい学力観に基づいた思考力・表現力を問う問題を取り入れております。もちろん各教科の出題傾向に大きな変更はございません。受験生の皆さんには、知識だけに頼らず、根拠をもとに論理的に思考・活用・表現する問いへの対応力も養ってほしいと思います。

国語

入試問題のねらい

国語科の目指す教育は、端的に言えば、「情と理」を兼ね備えた人を育てることです。時代がどんなに変化しようとも、豊かな情操と明晰な論理的思考力をバランスよく備えた人材を育成することが重要だと考えています。

本校の入試問題にはこのようなメッセージが込められています。「情」については「小説」で、「理」については「説明文・論説文」で力を試すべく、例年二題の長文読解を出題します。記述問題では、文章から読解したことを正確にまとめることができるかを問う問題や、テキストに対する主体的な読みを、客観的根拠をもとに自分の言葉で表現できるかを問う問題を出題します。あわせて、国語全般の基本的な知識を問う問題(文法・ことばの知識・語彙等)を長文読解の中に織り交ぜています。漢字の読み書きは、問題を独立させ必ず出題します。

問題構成・配点

【一般入試】

- | | | |
|------------------|-----------------|-------|
| (一) 説明的文章(44点前後) | 3000～4000字程度の文章 | 10問前後 |
| (二) 文学的文章(44点前後) | 3000～4000字程度の文章 | 10問前後 |
| (三) 漢字(12点) | 書き8問 | よみ4問 |

【帰国入試】

- | | | |
|-------------------|-------------------------------|-------|
| (一) 漢字(12点) | 書き8問 | よみ4問 |
| (二) 日本語知識(30～40点) | ことわざ、四字熟語、慣用句、文法事項、日本語の力を問うもの | |
| (三) 説明的文章(50点前後) | 3000～4000字程度の文章 | 10問前後 |

その他

○問題は易から難という配列にはなっていないので、易しい問題から取り組むことがポイントになります。まず(三)の漢字を、次に自分の得意とする問題ジャンルを解いていくことが望ましく、難しい問題は後回しにするよう心がけてください。

【読解問題(一)(二)】

- 配点 客観問題 1点～4点 記述問題 4点～8点
- 記述問題は内容に応じて部分点をつけることがあります。
減点対象 文末の呼応ができていない、誤字・脱字・文法的誤り、不十分な表現内容など
- 0点扱い 指定字数に満たない解答 指定字数を超えた解答

【漢字】

- 楷書で記入してください。
- はね・とめ・はらいなど、厳格にチェックはしませんが、あいまいな字や画数が変わってしまうような乱れた表記は0点とします。

算数

入試問題のねらい

数学では、問題を多角的に捉え、分析し、解決に至る過程を論理的に構築できる力が求められます。そのために、まずは正確な計算力、典型問題の解法の定着が必要不可欠です。その上で、試行錯誤して、複雑な問題を解決する力が必要になります。本校の入試問題では、その両方の力をバランスよく測ることをねらいとしています。

昨今では、思考力・判断力・表現力等を育成するために数学的な表現を用いることや、日常生活における事象を数学的に解釈し、活用することも求められています。論理的な思考・表現力をより評価いたします。

問題構成・配点

1. 計算問題 3題 標準的な四則計算
 2. 一行問題 5題 速さ、濃度、場合の数など算数で扱う基本的な問題
 - 3～6. 融合問題 小問合計12題(大問1つにつき3題)
図形に関する問題、グラフを読み取る問題等、工夫を必要とする問題
- 配点は、1題5点です。

その他

- 円周率は 3.14 です。既約分数にできていない場合は減点します。
- 解答欄にはすべて単位が記入されています。
- 融合問題には途中式を書くスペースがある解答欄がいくつかあります。
答えを出すまでの計算や図、考え方が書いてあれば、部分点をつけることがあります。
各問題の指示には従って下さい。

理科

入試問題のねらい

「LED 電球の方が白熱電球より電気代が安いのはなぜ?」「酸っぱいものに共通する点は何?」「人は他の動物とどこが同じでどこが違うのだろう?」「温泉の湯煙はなぜたつの?」等々、自然現象のしくみや日常の中で感じた疑問を解き明かしていきたいという知的好奇心、それこそが自然科学の原点です。その知的好奇心を刺激し、課題に正しく答えるための知識、論理的な思考力、疑問に対する課題解決能力などを育てるのが理科という教科だと私たちは考えています。知的好奇心に満ち、活気ある授業が展開されるためには、私たち教える側の工夫はもちろん重要ですが、理科が大好きな生徒、積極的に取り組む姿勢を持った生徒、身近な自然現象や自然科学のニュースに関心がある生徒の存在も欠かせません。私たちは単なる知識だけではなく、子どもたちの興味・関心の高さや知的好奇心の旺盛さが反映されるような入試問題づくりを心がけています。

問題構成・配点

問題構成は大問が4問で、理科の各分野である物理・化学・生物・地学の中から1問ずつ出題します。その時の科学的な話題や環境問題などを取り上げることもあります。また、教科書の内容に関連する身近な応用問題も出題します。小学校3年生以降の教科書の内容は参考資料も含めて、満遍なく勉強して下さい。

子どもたちが持っている科学的思考力や観察力、表現力や実験企画力、検証力や考察力など、自然科学に必要な問題解決能力を測れるような問題をこれまで以上に積極的に出題します。大問の中の小問の一部がこのようなタイプの問題の場合もあれば、大問1問がまるごと、このような問題になっている場合もあります。

大問の配置は、易しい順に並んでいるわけではありませんので、得意な分野の問題から解いていくとよいでしょう。大問の中に小問が多数ある場合は、できるだけ基本的な内容から難しい内容になっていくように作っています。配点は、大問1つあたり15～20点になります。

その他

理科の問題は、持っている知的好奇心、理科の基本知識の運用が中心となります。解いたことがない、答えを導き出しにくそうな問題でも、自分の経験や知識を総合して考えることで正解へと到達できます。その問題の前後の記述の内容も大きなヒントになることがありますので、しっかりと問題を読み解くようにして下さい。

問題を解くときには、きちんと問題の指示に従うようにして下さい。「すべて答えなさい」「1つ答えなさい」「記号で答えなさい」などの指示に注意しましょう。漢字がわからなくてもとにかく書くようにしましょう。特別な指示がない限り、内容を読み取ることができれば得点につながる可能性があります。また、単位を必要とする問題には必ず単位をつけるようにしましょう。

論述問題では、短い文章のつなぎ合わせであっても、自分が考えていることが正確に伝えられるように、主語・述語の関係がはっきりするような文章を書く練習をしましょう。

社会

入試問題のねらい

本校の社会科では、「知識を使って考える」ことを重視しています。社会科は「暗記科目」だと言われることが多く、覚えた知識を答える問題が出題されると思われています。知識をそのまま答える問題だと、暗記することが目的になってしまいます。社会科という教科は本来、知識に基づいて考えることが目的であり、知識は考えるための材料に過ぎません。もちろん歴史や地理の「用語」を答える問題も出題されます。その多くは基礎的な知識です。なぜなら考えるための材料が定着しているかを確認するためのものだからです。ですから、より本質的な問題は、「知識を使って考える問題」になります。では、「知識を使って考える」とはどのようなことなのでしょうか。「考える」ことはいろいろな方法があります。その中で我々は以下の方法を中心に入試に活かしています。

「具体的な知識から規則性や構造を見出す」

「一見無関係に見える事象の間に因果関係などを見出す」

「具体的なことがらを抽象化して、本質を見出す」

「抽象的なテーマに合わせて具体的な例を挙げる」

「同じような事象を比較することで、両者をより深く認識する」

このような思考を想定して、私たちは入試問題を考えています。さらに、もう一つ忘れてはならないことがあります。いろいろな知識の中から「自分で『問い』を見つける」ことです。いろいろな知識の中から、疑問や不思議なこと、強い関心などを見つけ、それを自分の「課題」とすることです。さらに、その問いや課題を考えるためには何をどうやって調べればいいのかを考えることです。こうして問いが問いを生み出し、より深い問いに向かっていきます。

最後に、知識を使って考えるために大切なこととして、「自分の言葉で表現する」ことを挙げておきます。誰かの表現やどこかの表現を借りていたのでは、思考は活性化しません。自分らしい表現をすることで、思考は生きたものになります。そのためにもぜひ日常的に自分の「問い」を見つけ、それを表現するようにして欲しいと思っています。

問題構成・配点

1番目は歴史の問題で、配点は25%程度。特定の時代に偏ることなく満遍なく出題します。2番が地理で、3番が公民分野からの出題になります。配点はあわせて35%程度になります。4番と5番に「時事問題」と「仲間はずれ問題」が配列され、あわせて15%弱の配点になります。「時事問題」の対象は、一応12月までが範囲と考えると考えてください。また、「仲間はずれ問題」は分野の指定はありません。6番が「総合問題」です。これは、本校の社会科問題の特徴といってもいい問題です。配点は25%を目安にしています。

その他

特別難しい知識を要求することはありませんが、考える力をみたいと思っていますので、記述は多くなってきます。普段から問題に接したときに自分で考えること、また自分の考えを文にまとめる練習をしてください。なお、問題量・構成はともに例年と同じようなものになります。漢字で答えるべきかどうかということについては、特に指示のある場合を除けば漢字で答えなくても正解とします。また、論述問題は国語の試験ではありませんので、文法などを厳格にチェックすることはありません。